AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2017.9) 平成28年度:21.

精神科閉鎖病棟に入院する患者の所持品制限に対する家族の意識

前川 はる佳

精神科閉鎖病棟に入院する患者の所持品制限に対する家族の意識

キーワード：精神科閉鎖病棟、所持品制限、家族
○前川　はる佳
旭川医科大学病院

Ⅰ目的

精神科閉鎖病棟で所持品制限がある患者の家族の所持品制限に対する思いを明らかにし、病棟内の安全と患者の治療環境を守るための介入を検討する一助とする。

Ⅱ方法

対象はA病院の精神科閉鎖病棟に入院し、所持品を制限されている患者2名の家族とした。調査は、文献を参考に質問項目を作成し、半構成的面接を実施した。面接で得られた逐語録から意味・類似性に従いカテゴリー化し分析を行った。

Ⅲ倫理的配慮

対象者と患者に研究の主旨、プライバシー保護について説明し同意を得た。本研究は研究者の所属する倫理委員会の承認を得た。

Ⅳ結果

1. 所持品制限に対する家族の思いは、22のサブカテゴリー、9のカテゴリー、2のコアカテゴリーを生成した。結果を表1に示す。

表1　所持品制限に対する家族の思い

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
所持品制限そのものへの思い	所持品制限があっても支障はない	・イメージより制限が厳しくない ・制限はありながら借りることが出来るという自由さ
	所持品制限があると不便	・保護室にいた時は窮屈だった ・所持品制限で不便と感じることはある ・制限以外のもので対応する大変さ ・同じものでも毎回確認を受ける面倒さ
	所持品制限があることは仕方ない	・病棟の決まりなので仕方ない ・精神科では所持品制限は仕方ない ・治療を受けている上での妥協
	所持品確認は安全を守るために必要である	・危険が起きてからでは遅い ・安全のために確認を行うのは必要 ・確認されなかった物が危険につながる恐怖／不安
	所持品制限があり安心する	・患者の精神症状の変動があり、制限がないと心配 ・患者に渡す物をチェックしてもらう安心感
	所持品制限の知識がなく不安	・専門的知識がないことでの不安 ・看護師に相談にのってほしい
所持品制限を通して患者に対して感じること	患者の病気についての自責の念	・病気への自責の念
	患者への関わりに対する葛藤	・患者を甘やかすなという周囲の意見との葛藤 ・所持品制限が必要な治療の一環とわかりつつも辛い思いをさせているという葛藤 ・患者を自由にさせてあげたい ・患者の希望に応えられない悲しさ
	今後の生活に対する不安	・患者の今後の生活に関する不安

2. 患者が病棟に持ち込めない物を家族に希望した場合の家族の対応は、持ち込めない理由を伝える、希望を持てるようにする、看護師に相談するように伝える、代替案を伝える、希望に添える関わりをする、という大別して5つの対応を行っていた。

Ⅴ考察

先行研究では、危険物としての認識よりも使用目的としての認識が優先され、危険物と思うものでも持ち込むことがある[1]と述べられていた。しかし、本研究では、所持品制限は家族にとって不便はあるが、適宜病棟から貸し出し等をしており、必ずしもネガティブな捉えでないことがわかった。それよりも家族は、患者の安全を守りたい思いが強く、所持品制限が必要と理解されており、所持品制限があることで家族の安心につながっていた。よって、所持品の確認の場も家族の安心につながるようにすることが重要である。そのため、家族に所持品の確認が、患者と病棟の安全につながると伝える必要がある。看護師は、家族とコミュニケーションをとり信頼関係を築いておくことで、患者が家族に見せる普段の様子を知り、患者の安全について話し合うことができると考える。

精神疾患は長期にわたる治療が必要で、症状の変動を繰り返すものが多いため、家族は患者の生活上の困難を身近に感じやすいと考える。本研究で家族は、所持品で不自由をさせてしまう病気を持たせてしまったという自責、治療の一環とわかりつつも辛い思いをさせているという葛藤、患者の今後の生活に関する不安の感情を持っていることが明らかになった。看護師は、家族の気持ちを理解し、所持品制限や精神症状を考えたとき、戸惑いや不安に思ったことがあれば看護師がいつでも相談に乗ることが出来ると伝えることが重要である。今回の対象者は、患者が持ち込めない物を希望した時に工夫して対応できていたが、症状の程度や家族関係によっては対応が困難と感じる家族もいると考える。家族は所持品制限について専門的知識が無いため、家族だけで全て患者に対応せず、看護師に対応を代わったり相談したりしてもらうことが重要である。また、制限されている物品を持ち込んでしまう家族の心理として、患者への自責、葛藤による感情が影響する可能性があると示唆される。

Ⅵ結論

1. 家族は、患者の安全を守りたい意識が強く、所持品制限を必ずしもネガティブに捉えておらず、制限があることで家族の安心に繋がっていた。
2. 看護師は、家族の感情を理解し、いつでも相談に乗ることが出来ると伝えることが重要である。
3. 看護師は家族とコミュニケーションをとり、常に患者にとって安全な療養環境とは何かをアセスメントする必要がある。
4. 看護師は家族が患者の要求にどのように対応しているか把握し、適切な対応方法を助言する必要がある。

引用文献:1)横溝　奨:精神科救急病棟における家族に対する危険物の意識調査，日本精神科看護学術集会誌，55巻（1）528-529ページ，2012